

精神科學研究所
目

小田村寅二郎著

大東亞皇化圈論

— 日本世界政策の一段階 —

精神科學研究所
員

小田村寅二郎著

大東亞皇化圈論

— 日本世界政策の一段階 —

精神科學研究所

革新論に宣戦す（序に代へて）

世界變革期とか、東亞民族の解放とか、長期戰論、總力戰體制論、計畫經濟統制經濟論、新體制論、かういふ輕薄な根のないお座なりな公式主義は、漫々の支那を相手の戰爭には間に合つたが、も早その時代は過ぎてゐる。革新者流こそ、忍ぶべからざるをも忍んで國力を維持し時の至るを待つてゐた忠勇な臣民の深慮苦節を土臺にして、淺はかな大言壯語をしてゐたものであることが、次第々々に心ある人々から認識されはじめてゐる。我々は夙から、彼等こそは、もう二十年も前に流行したマルクス主義の商品を、八紘一字一君萬民の日本人向包み紙に包んで、聲張り上げて賣りつける夜の商人であることを世の人々に警告して來た。この叢書はその警告の一つの例である。我々の言つたことが、正しかつたか正しくなかつたか、それはこの叢書を読み乍ら、對米英開戰後の事態の展開を見續けてゆくとき、いよ／＼はつきりとして來るであらう。本叢書は一つの豫言集となつた、いよ／＼なつてゆくであらう。

昭和十六年十月二十五日から十一月二十日迄、毎週三回全十二回に涉り、赤坂三會堂に於いて開かれた日本世界觀大學第一期講座の講義を、こゝに印刷に附しようとするとき、十二月八日の對米

英開戦、同日拜した宣戦の大詔、引續く海軍航空隊の輝かしき戦果等を挿んで、こゝに大きな時代の變化を感じざるを得ない。それは全國民の等しき感銘であらう。例へば不擴大といふやうな言葉は用ひられる隙もない。「蔣介石を相手にせず」といふ曖昧な聲明もない。敵國との平等、無財也、不割讓などいふ、前歐洲大戰第四年社會民主々義獨逸内閣と革命ロシアとの間に締結されたブレストリトウスク條約に似た宣言も、勿論今日には行はれない。否、さういふものは既に國民の頭から離れられようとさへしてゐる。さうして、正當な猛烈なる敵愾心が漲り、而も、大戦果が既に發表されてゐる。最早革新者流の言ふ宣戦なき戦争ではない。天下晴れての戦争である。

宣戦の大詔は何といふ有り難い大御言葉であらう。臣民は 明治天皇が下したまへる清國に對する開戦の詔書、露國に對する開戦の詔書、また 大正天皇が下したまへる獨國に對する開戦の詔書、と同一の御精神を以て、聖訓したまへるを仰ぎ奉る。天佑を保有し萬世一系の皇祚を踐ませたまふ天皇の宣したまへる戦争である。東亞の安定を確保して世界の平和に寄與せむと軫念あらせたまふ天皇の宣したまへる戦争である。 天皇陛下はいま「帝國ノ存立亦正ニ危殆ニ瀕セリ」と宣ひ「皇祖皇宗ノ神靈上ニ在リ」と聖諭し、「速ニ禍根ヲ芟除シテ東亞永遠ノ平和ヲ確立シ以テ帝國ノ光榮ヲ保全セムコトヲ期ス」と勅したまふ。臣民たるもの、聖諭を奉體して神靈に祈り奉り、帝國存立の

ために戦ふより以外に道なかるべきに、世の輕佻者流は、大詔渙發の開戦當日に及んでも、なほラヂオを通じて世界變革を説き、現状維持國家群に對する現状打破國家群の鬭争を喧傳怒號する。それは 聖詔奉體の臣道にそむき、甚だしく忠誠なる臣民の感情に反撥する。我等はかくの如き驕慢を今日放任して、果して忠義を全うすることが出来るであらうか。

一體世界變革の爲に戦ふならば、一つあつて二つなき命を 天皇陛下に獻げ奉ることは出来ない。天皇陛下は世界變革をではなく、世界永遠の平和を念願したまふ故に。東亞解放といふ如き曖昧にして屈辱的用語もまた大詔の聖旨に反する。もし東亞解放や新體制の爲めに戦ふならば、どうして東亞解放萬歲新體制萬歲といつて日本國民は死なぬのであらう。これだけで、かゝる考へ方が、日本國民の信念に反し、日本歴史に背くものである證據である。若し夫れ新たに經營開發の任に當るべき大東亞の經濟を、細かしく動きのとれぬ計畫と統制との反躍進的消極政策に委ぬる如き愚策、いま赫々たる大勝を得て意氣大に揚る日本國民が承認するであらうか、否か。否、凡ゆる困苦に堪へても大躍進を實現すべく念願する日本國民の大積極精神が、かゝるものを許すであらうか。

我々は今日こそ、はつきりと全國民が詔書奉體一本で進まねばならぬことを覺るべきであることを絶叫するものである。大學の半赤化教授や、時流に阿附するジャーナリストの口吻を學んで、本

當の忍苦もなく、従つて本當の發展を期し得ない齒の浮くやうな革新論を一掃せねばならぬ。政府は大詔渙發の日聲明して、「全國民は今次征戰の淵源と使命とに深く思を致し、苟も驕ることなく、又怠ることなく、克く竭し克く耐へ以て我等祖先の遺風を顯彰し」と言つた。「苟も驕らず」と言ふは、單に外國に對して驕らぬことではあるまい。驕らざる心、謹しめる心は、日本國民にとつては「詔を承りては必ず謹め」と上古より訓へられたる謹慎の心である。我々は、支那事變五年の間に暴露された日本國民思想の舊態混亂が、いま宣戰の大詔を拜して、眞の改新の契機を得たものであると信ずる。

人生の生々開展の法則を否定する革新論の公式主義で、日本を永久に現状に統制固定するか、或はまた、眞の世界觀に覺醒して、天壤と共に窮りなき皇運を扶翼し奉り、大日本帝國永遠の繁榮によつて、眞の世界平和を實現するか、今や日本國民は二者擇一の岐路に立つて居る。それは忠勇なる日本臣民たるか否かの決定點でもある。答は言ふ迄もなく明らかである。我等は道筋を明らかにして進まねばならぬ。

昭和十六年十二月十五日

田 所 廣 泰

目次

第一 日本國內に先づ不動の秩序を確立せよ

序

一、唯物史觀を排して日本の歴史觀へ

「世界史的意義」とか「世界史の必然」とかはわけのわからぬことである

二、日本的歴史觀の内容たる日本世界觀の要點

個人と全體、私と公といふことについて

戦時と平時のけじめ、緊張と弛緩の交替

三、國體に立脚する政治の具體的在り方

宗教政策について——國教統一論の不可なる所以

政治形態について——一國一黨論乃至全國民政治組織化の我が國體に絶対に相容れざる所以

第二 大東亞皇化圈確立の指標

序

- 一、世界が數箇のブロックに分れるといふ見解に對する疑義……………三
- 二、南米と東亞とを秤にかけつゝ、動いて來たアメリカの、魂膽は？……………五
- 三、遠隔の地、東亞で戦ふ不利をかこつ英國の極東政策……………元
- 四、人民戰線工作と積極的革命工作を交互に行ふ、巧妙極まるソ聯の世界外交……………三
- 五、東亞諸國の政治力を統一し日本を中心として結集せしめよ……………壹
- 六、東亞諸民族の獨立運動の真相……………望
- 七、東亞の地勢は日本が世界文化を綜合統一すべき使命を暗示する……………五
- 八、東亞諸民族は「愛民の天子」の降るを待望しつゝあり……………英

第一 日本國內に先づ不動の秩序を確立せよ

序

聖戰五年未だ解決の曙光すら見られぬといふこの支那事變は、このまゝにして今後如何なる形で進められるのでありませうか。日米戦争、南進論共に國運を賭すべき重大案件であります。今日の日本に伏在する目に見えない國內の動きこそは、かゝる外交關係にもまして、國民精神の動向と國體の尊嚴性に對して極めて重大な事態をもたらすつゝあります。東亞新秩序建設といひ八紘一字といひ、すべてはその中心となるべき日本自體の問題であること申すまでもありませんが、日本の國內に國體と共なる永遠の秩序を確保することと、國民精神を昔ながらの美點を有して永久に健全に保つてゆくことこそ、すべての問題の基本的條件であります。東亞新秩序に關する諸々の議論が、或は東亞協同體論となり或は東亞聯盟論となり、又東亞解放論として唱へられて來ましたが、今私が大東亞皇化國論と新しく命題して、些か所懐の一端を申し陳べようと致します所以は、それらの所説、並びに所謂新體制論一般に對して、私は根本的疑義を挿むばかりでなく、その悉くと申してよい程、これらがマルクス唯物史觀に魅惑された歴史觀の上に立つてをることを指摘致したいと存じます。又もしこのまゝの行き方が、何等の根本的修正をなされずに萬一にもすゝめられたならば、何時の間にかに日本國民本來の物考へ方も歪められてしまひ、國家の傳統的な強さもいつしか失はれてしまふことを憂へまして、外交情勢の複雑化よりも國內の動向それ自體の中に深刻な國難の到來を目に見るからであります。それ故、大東亞皇化國論の本論に入るに先立ち、先づそれらの點に關して日本歴史にありのまゝに

立脚する立場を明かにし、日本國民として把握すべき「物の見方」、又萬事を判斷するに際して據つて以て立つべき「價值判斷の基準」に就きまして、些か事變下の國內諸思想に關聯しつゝ所信を披瀝致したいと存じます。

一、唯物史觀を排して日本の歴史觀へ

歴史の見方を正すことは、今日の様に政治・經濟・社會各方面に改革がなされる時に當りましては何よりも大切な事であります。昨今色々の書物や新聞雜誌、又講演などに於て共通してみられる一つの歴史の見方、そして國民の常識とさへならうとしつゝある歴史の見方も、かゝる意味で極めて嚴密に之を檢討し之に反省を加へてゆくことが今は殊更に必要な時と考へられます。

今日流行してをります歴史觀は、「社會は必然的に轉換するものであつて、封建主義社會の後には資本主義社會が出來、その資本主義社會が發達して進みますと、高度資本主義の社會となつて中小商工業は必然的に崩壊し、大商工業即ち大資本に統合されてゆき、やがてその爛熟期に至るとその社會も滅び、次に歴史の必然性に從つて全く新しい次の社會が生れる、」といふのであります。これはマルクス唯物史觀に出發する歴史の見方でありまして、マルキシズムに於ては「次の全く新しい社會」とは社會主義の社會、共產主義の社會を意味するのであります。之は、歴史の選り變りを經濟の現象の上からのみ見て、政治・經濟・文化すべてを含む歴史全體をそれで規定してかゝるのでありますからして、それだけでも本末を誤り、全體と部分の關係を轉倒せしめる誤つた考へ方と云はれて來たものでありま

す。何故ならば、經濟は元來政治の一部分であり、政治は經濟・文化・宗教・藝術等の國家の諸要素を統一し綜合して成り立つものでありますから、經濟のみから出發して政治や歴史の動きを規定することは、國家社會を「物」の面を中心として解釋することであり得ません。日本の様な深遠な政治原理と高度の文化を持つ、世界無比の精神的な國家に於ては、その歴史の流れや國家の動向を考へるに際して、かゝる唯物的な見方を基本とすることは到底許されなからであります。萬邦各々その所を得しめ、萬民悉くその所を得しめるといふ我が日本の國是は、それは、この世界に嚴然たる秩序を正しく保たせることを意味しそれを念願するものであつて、國內の政治の秩序に於きましても、政治・經濟・文化等に、各々上下本末の秩序を必要とし、それを缺くべからざる條件とするものと考へられます。

事變以來新體制の論議が盛んになりましたから、まことに残念なことには、封建主義社會↓資本主義社會↓新體制といふ公式がはやり出しました。資本主義は遂に行詰つた、これからは「全く新しい」社會組織にならなければならぬ。さうしなければ「新しい」形態の戰爭である支那事變も解決しないし、東亞の新秩序も出来ない。日本自ら率先して舊體制を捨て、新體制の國家社會にならなければならぬ。とさうした意見が續々全朝野を風靡してまゐりました。政府で出された週報や週報叢書にまでそれと同類の考へ方が盛られたりしたのであります。昭和十五年十二月の週報叢書「新支那讀本」には、ナチスの勝利を解説して「ドイツの勝利は、要するに新しき國家體制の古き國家體制に對する勝利であり」と記してありまして、體制や機構や組織の新・舊が勝利の分れ目であることを強調致してをります。

民間から出た意見のいどのになりますと、明治維新は、日本の體制を封建主義社會から資本主義社會に轉換せしめた所に、維新の「世界史的な意義」があるのだと説き、昭和維新はその「世界史の必然」に従つて、日本を資本主義社會から全く別の新體制國家にするのだ、といふ様なことまで言ひ出したのであります。そしてそれからは「好むと好まざるとに拘らず」新體制に體制替へしなければならぬといふ風に、盛んに「好むと好まざるとに拘らず」といふ言葉が流行り出したのであります。

「世界史的意義」とか「世界史の必然」とかはわけのわからぬことである

しかしこゝで皆様と共に、もう一度根本に遡つて考へねばならないのではなからうか。日本國民は「好む」も「好まぬ」もなく、お國のためならば如何なる事を辭せぬ覺悟で、この事變に臨んでをりますが、それはこの尊い國體を永遠に傳へ、又とない日本の歴史を命を捨て護らんとするからであります。一體封建主義社會から資本主義社會に轉換したといふのが明治維新の解釋として許されるではありませんか。否々斷じて然らず。徳川時代はたしかに封建諸侯割據の時代ではありましたが、我々日本國民は、徳川時代は 天つ日の疊つた時代、 天皇御親政の汚された時代と考へてをります。明治維新はその暗雲を一掃し、再び輝かしき秩序を回復した所に、唯一つの又二つとない意義が見出されるのではございませんか。歴史を見る見方は幾通りもございませう。しかし深山の見方の中から、日本人として見るべき見方を選び、それを固く固く心に銘して歴史に臨むことが、何よりも大切な日本臣民の情と存じます。それ故に明治維新も、實を申せば明治十年頃から、外來文化の無批判な輸入によつて、遂に西洋の屬國化した精

神に國民が墮落してしまつた時には、もう既に維新の意義は再び没し去られてしまつたのであります。明治、大正、昭和にかけての國內思想の混亂、又政治家・財閥・政黨の腐敗も、そのことごとくは、日本人として持つべき心を失つた所から生れたものであります。國內總赤化の徴を示したマルキシズムの勢力、又その變形としての人民戦線や、天皇機關説にまで至つたデモクラシイ等、それらをこそ清掃し絶滅することが、今日の日本國民に課せられた時代的使命であつたのであります。もし昭和維新といふならば、さうした所にその意義を見出すべきでありますし、それは事實、明治維新の眞精神を受け継ぎ、明治維新を眞に完遂するものでなければならぬ筈であります。

しかるに昭和維新とは資本主義社會が崩壊して新體制になることだなどとは、何たることでありませうか。「世界史の必然」とか「世界史的意義」などといふ空漠な考へ方こそ、どれだけ國家を誤り國民を誤らせるものでありませうか。日本の歴史は、さうした唯物史觀に立つ人々が云ふやうに、時代の轉換毎に「全く新しい」體制にかはるどころか、時代と歴史が切斷され斷絶されることを排して、一貫した流れを中心に護つて來たものであります。徳川時代がいかに封建諸侯の時代であつたと云へ、徳川時代を概括して、單に封建主義社會と規定すること自體、すでに偏つた見方でありませう。徳川時代を回顧し回想して、國民の心に浮び上る第一のものは、天つ日のかげつた暗い影であります。決して決して日本の國內が封建主義社會であつたといふ如き、經濟的な考へ方に關聯するものではない筈であります。又明治、大正、昭和の時代を資本主義社會といふのもよろしいでありませう。しかし、それは單にさうよびならされて來たといふだけのことでありまして、その時代の幾多の弊害が、資本主義社會の機構や體制や制度にあ

つたときめてしまふことは、自ら臣道感情を反省することの餘りにも薄く、歴史の姿を見誤るも甚だしい考へ方であります。

それは何故であるか。憶ひますに、明治、大正、昭和を資本主義時代と申しますが、その時代の社會機構にしてみた所が、決して明治になつてからはじめて出來たもの、即ち、マルキスト達が云ふ様に、所謂資本主義時代のみに特殊なものばかりではないのであります。否マルキスト達が云ふ様な資本主義時代の本質をなしてゐるといふ、私有財産制度、資本蓄積の自由や、又政治上について云へば單一な全國民的政治組織でなくして、いくつかの政事の黨派の存すること、等は、日本古來幾百千年來の姿であります。それを 明治天皇が欽定憲法によつて帝國憲法としてお定めになつたために、明治以來成文化されたまでのことでもあります。 明治天皇御身親ら憲法發布に際しての御告文に「……惟フニ此レ皆 皇祖皇宗ノ後裔ニ貽シタマヘル統治ノ洪範ヲ紹述スルニ外ナラス而シテ朕カ躬ニ逮テ時ト俱ニ舉行スルコトヲ得ルハ洵ニ 皇祖 皇宗及我カ 皇考ノ威靈ニ倚藉スルニ由ラサルハ無シ……」と仰せられてをられるのであります。

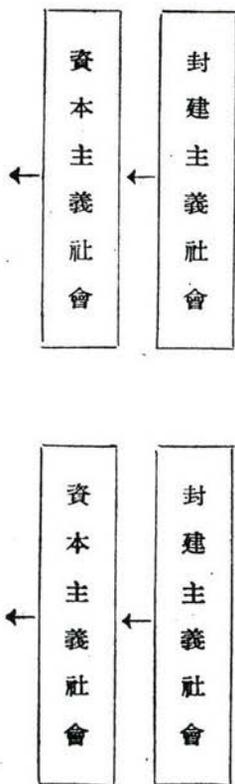
社會の表面的な形態や、第二義的な體制は時代と共に變つてゆきませうし、又變らねばならぬこと申すまでもありませんが、その根本的な原則は政治にせよ、經濟にせよ、國體の無窮なる限り存続されなければならぬと存じます。國體と申しましても、現實の國家社會から抽象されては存在し得ぬものでありますからして、この點をよく考へねばならぬのであります。臣道實踐、大政翼賛といふ言葉を掲げ、國體の尊嚴なることを力説しさえすれば、政治や

經濟の根本組織は次々に變改してかまはぬといふことは、洵に大それた考へ方であります。而も明治、大正、昭和の時代の諸々の禍根が、その時代の根本の體制に缺陷があるためだ、などと申しますことは、その時代に生きた、我々の祖父や又我々自身の忠節意志が曇つてゐた所から生じた弊害を、長くも 明治天皇がお定めになつた體制に缺陷があるとして、責を上へ歸せ奉るごとき不徹不忠の言説と見ねばならぬであります。さうした意見を輕々に吐く人々は、決してさうは氣づかないのでありませうが、事實は、かくのごとき結果になつてしまふのであります。所謂資本主義時代の弊害を除去し清掃してゆくことには、全國民ほんとに心を一つにしてすゝんでまゐりませう。しかし問題の把へ方並びに物の見方は、常に本末を誤ることなきに萬全を期せねばならぬこと、まことに緊要であります。

このことに就きましてもまだ色々陳べたいことがございますが、兎に角一應圖式に致しておきますから、この誤つた史觀だけは、はつきり頭にお入れたゞきたいと存じます。

マルキシズム

流行思想



共 産 主 義 社 會
社 會 主 義 社 會

新 體 制 の 社 會
協 同 主 義 社 會
指 導 者 國 家
（ 産 業 國 家 管 理 の 社 會 ）

右の上下は最後の所で言葉が相違してゐるだけであります。それについての説明も色々致したのであります。たゞこゝでは一言のみ申し添へます。それは日本に人民戦線が出来ました昭和十年頃に、マルキストが云つてゐた言葉であります。日本では私有財産否定といふことは到底認められないから、實質が同じで形式の異なる方法を考へねばならない。そしてそれは産業國家管理といふことである。とさう申してゐたことでもあります。又それに關聯しても一言述べますならば、ナチスドイツは、戦争の長期化につれて、生産擴充の徹底的な要求から、次第に中小工業の發達と助長に意をつくし、僅少資本でも、僅少資材でも直ちに生産に従事出来る様の努力をなしてゐるといふことであります。彼此ともに何等かの御参考になることゝ存じ、一言申しそへた次第であります。

それにつけましても、事變以來の日本朝野の考へ方は、顧るだに戰慄を禁じ得ぬものが實に多いのであります。先程一寸引用致しました週報叢書「新支那讀本」には、次の様な記述が記されてゐたのであります。

「ドイツの勝利は、要するに新らしき國家體制の古き國家體制に對する勝利であり、新しき戦争觀の古き戦争觀に對する勝利である。そしてこの古き世界秩序が、新らしき世界秩序を建設せんとする全體主義國家の攻撃の前に、一たまりもなく崩壊してゆく姿をわれわれは歐洲の天地に見てきた」

即ち資本主義社會といはれる社會の機構や體制の崩壞を指摘してゐるのであります。そして更につゞけて

「これを人は歴史の必然と呼び或は史代の變革期と呼んでゐる。その用語の妥當性はともあれ、洋の東にも西にも、新しき世界秩序建設の黎明が訪づれ、新しい世界歴史の第一頁が書かれ始めたことは嚴然たる事實である」と述べてゐます。「新しい世界歴史の第一頁」とは何でありませうか。云ふまでもなく、今日までとは全く新しい「新體制」の社會を云つてをるのであります。それ故にこそ、「歴史の第一頁」との様の言葉が用ひられ得たのであります。そして更に

「何人でも、また、いかなる國家でも、歴史の流れに抗して立つ者は結局は亡びざるを得ないのである」（圈點すべて著者）

と、驚くほどの大膽さを以て記述がなされてをります。まさに「好むと好まざるとに拘らず」であり、日本歴史の必然ではなくして、世界歴史の必然が、何を根據としてかはわかりませんが、實に實に確信にみちて説かれたのであります。そして「いかなる國家でも、（この）（註、著者）歴史の流れに抗して立つ者は結局亡びざるを得ないのである」と云ふのでありますからして、日本もその世界歴史の流れ？ に従はなければ、即ち資本主義社會（明治、大正、昭和の社會機構）を崩壞せしめて新體制にならなければ、日本も亦亡びざるを得ないといふのであります。報叢書なるが故に、之以上の解説は許されないのであります。皆様御自身の心にお考へ願ひたいと存じます。まことに日本はたゞならぬ五年間を歩んで來たのでございます。

要するに時代の動きや、歴史の見方はいくらでもあります。日本國民は日本國民として最も大切な問題を基準として、歴史を見、時代を見ること、そして、若しそれを誤るならば、それは即ち國家傳統の破壊の日であり、國民精神の百八十度轉換の時であり、國體は有名無實となる虞れを豫感すべき秋であります。まことに物の考へ方、物の見方、云ひかへれば、思想は、實に實に國運を左右する重大な問題であります。

二、日本の歴史觀の内容たる日本世界觀の要點

以上、封建主義社會↓資本主義社會↓新體制といふ様な唯物的な見方、そして歴史を切斷する様な考へ方を排して、我々日本國民は、國體と共に一貫する價值判斷の基準を持つべきことを強調し、又明治維新に對する昭和維新などといはずに、覆沒せられた明治維新の眞精神を、今こそ全國民一致協力して完遂すべき時であることを申したのであります。さうした日本の歴史觀については、更にその内容を申さぬならば、やはりはつきりとそれを把へていたげないのではないかと存じます。

個人と全體、私と公といふことについて

日本國民の生活は全體主義であるとか、又「公」そのものであるとか申しますが、しかし私の心といふものを離れた「公」といふものは、事實頭の中で考へられたものにすぎないと思ひます。尤も、「私」と申しましたも、すでに日本人として考へるべき考へ方を前提として申すまでもありませんから、利己的、功利的な考へ方をこゝで

「私」といふのではないのであります。しかしながら、日本人は公と私とを明確に區別するだけに、たとへば戦に征で出つ時、日本人は、家を憶ひ父母妻子を憶ふ情きはめて強く、絶ちがたい恩愛の絆をふりすてふりすてつゝ進むが故にこそ、戦場に於きましても忠烈な行動に出ることが出来ると思ひます。私情を尊び、しかもその私情に生きつゝある人間が、その私情をふりすてる所に、公に生きる純粹の精神が強烈に生れ出るのであります。云はばさうした私情をふりすてることは、公の世界に生きる時に一つの強力なバネの役目を果すやうなものであります。

それと同じ様に、商人といふものは商行為によつて生きてゆくものであります。明治天皇が士農工商の區別を撤廢遊ばされましたのも、商人が商人として生きてゆく私情をお認めになり、それがやがて國家の經濟力の力強い源泉になることをお考へ遊ばしたためと存じます。今日の様に「滅私奉公」が叫ばれることはまことによいことと存じます。それが原則と原理を誤つて、私情は罪惡であるかの様に云ひふらされ、又正しい利潤を求めてゆく商人をも、中間搾取と云つてみたり、利を求めること自體不届なことであるといふ考へ方から、商人をすべて配給官吏のごときものにしてしまはねばならぬ、といふ様なことでは、洵に人の道を辨へぬ非道な考へ方と存じます。聖徳太子は、私に背きて公に向ふは之臣の道なりとお教へになりました。私情を基礎とし、それを前提として生かしつゝ、公に向ふ道こそ日本臣民のゆくべき道とおさどしになつたのであります。この問題は國家社會の機構や組織の問題の根本條件として決して、閑却してはならぬ所と存じます。

戦時と平時のけじめ、緊張と弛緩の交替

今のべましたことと同じ様なことでありますが、人間精神には常に緊張と弛緩が交替するものでありますから、國家にしても同様でありまして、眞に強烈な戦争は、平時の蓄へた力が急激に、そして短期を限つて發露される時にこそ、最も強烈に行はれるものであります。又それ故に戦争そのものも嚴肅さと神聖さを持ちうるものであります。この個人並びに國家の生命法則を忘れるならば、國家の政治は、まことに危局にのぞむと考へねばならぬのであります。今日長期戦が叫ばれ、それは國難の到來を意味致しますから、全國民こぞつて、如何に長期にならうとも戦ひつゞけねばならぬのでありますが、戦争そのものゝ指導は常に短期完結、速戦即決を以て原則とすべきであります。

しかし考へてみますれば、事變以來近衛三原則が用ひましてから、戦争の意義につきましても在來の戦争のやり方は帝國主義戦争であつて、決して新しい日本のなすべき戦争ではない、領土もとらず、賠償金もとらず、戦後は兩國平等で國交を回復することこそ、新時代の目覺めた國のなすべき戦争だと云はれ出しました。極端なものになりますと、さうした原則に則つて日本が戦ふが故に、今次の事變は「聖戰」であると説き廻るものも出てまゐりましたし、國民も大方さうした考へ方に馴らされて來てをります。この様な眞剣さを缺いた戦争論は、實は勝つべき戦をいたづらに長期化し、平時と戦時のけじめをなくしてしまふ考へ方と一體であるのであります。しかし國民が昔から考へて來た「聖戰」の意味はさうした條件的の部分的のことではなくして、畏くも天皇がまつろはぬものを征討せられるために、皇軍をすゝめられるそのことにこそ、神聖さと嚴肅さをあらはし、それ故に皇軍がまつろはぬもの討ち平す、又神武天皇の御言葉によるならば「撃ちてしやむ」まで戦ひ抜き、一度皇軍が立ち上る上は、敵軍を「そ根目

つなげて撃ちてしやむ」と徹底的に撃ち盡すことが、聖戦の唯一つの意義であつたと存じます。そして討ち平げたまうた後には、それらの者をして 天皇にまつるふもの従ふものたらしめ、又 天皇はその従ふ者共を大みたからとして今までの國民と少しのわけへだてもなくみそなはし給ひ、又その土地の治安、經濟、文化あらゆるものについて、政治の責任を大御身にお取りあそばすのであります。それは領土を取るとか賠償金を取るとか云ふ物質的の問題では決してなく、更に更に全體的綜合的な御態度を以て臨ませられることに外なりません。戦争が終結をつけ、皇軍の勝利が確保せられた後には、皇軍の進んだ土地の住民達の、現在及び將來に亘る安寧と幸福とを、大御心に念じさせたまふ故にその土地を御統治遊ばすわけであります。そこには永遠の御責任と申しますか、日本の國體の無窮なるかぎり、その新しい土地と新しい人民の永遠の榮えを御約束遊ばされるわけであります。緊張と弛緩の生命法則を、もし忘れるならば、如何に美辭麗句をならべましても、日本國家自身の存亡、それは同時に東亞全體の崩壊を意味致しますが、日本國家の永遠を保すことも不可能となります。失はれた心を奪回し、清々しく、雄々しくすゝむものこそ日本でなければならぬでございます。そして戦時と平時のけじめを明かにし、戦時に緊急に必要とされる體制を、決して平時のそれに永遠に代るものたらしめる様なことがあつてはならないのであります。戦の勝利のためには徒らな道徳をふりまはしたりして戦争の結末が中々つかぬ様なこととしては、絶対にならないのであります。

三、國體に立脚する政治の具體的な在り方

それならば、日本國內の政治はどの様でなければならぬか。日本の政治は、云ふまでもなく國體を原理に仰ぐものでありますが、國體を原理とする政治に於きましては、政治の在り方、經濟の機構、又政治行政の組織等、具體的問題に就きましても、そこに國體の姿が普遍的にあらはれ、客觀的に示されなければならぬのであります。國體や國民の忠誠心を徒らに觀念的のものに止めますことは、萬惡の禍根を生ずる基であるばかりでなく、折角お國のため國家のためと思つて爲すことが、結局は大それた行き方になつてしまふ虞れが多分にあることは、今までのお話で可成り御理解いたゞけたことと存じます。それならばかゝる國體を原理とする政治は、具體的に如何なる形をとるべきでありませうか。經濟を以て政治の全局を律する様なことが許されないのは申すまでもありませんが、更に基本的要件と思はれます二三の點について申し陳べることに致します。

先づ政治上の組織や機構に國體が如何に表はされるかと申しますと、上御一人を至尊と仰ぎ、現人神と崇めまつる日本に於ては、國民の精神生活に動かすことの出来ない中心が確立してをり、天皇は國民の宗教的な歸依の對象としてのみならず、天皇御親政の御事と大元帥陛下としての陸海軍御統帥とによつて、國家の唯一の秩序の源をなしてをられます。かくのごとく國民生活の宗教的、政治的、文化的の中心が名實共に確立せられてをりますことが、實は國民一般に信教の自由を許させ給ひ、政治に關しては、政見を異にする政事結社の存在をお認めになり、文化的にも古今東西あらゆる文物の自由交流を奨勵せさせ給ふ所以であると拜察致します。

宗教政策について——國教統一論の不可なる所以

欽定憲法によつて信教の自由をお許しになるに際して、「日本臣民ハ安寧秩序ヲ妨ケス及臣民タルノ義務ニ背カサル限ニ於テ」と前提せられ、祖先崇拜、神社禮拜、天皇歸一の宗教的情操の下にのみ、信教の自由をお認めになられたのであります。國體に對する國民の信の問題に關しては、御諭しなることしかく峻嚴であり、絶對の權威を以て臨ませたまふことかくのごとくであります。それは又同時に、それが守られる限りに於ては、あらゆる事に關して寛容そのものごとく、おほらかなゆたかな大御心を以てみそなはしたまひ、又複雑なそして劃一ならざる動きを尊ばせたまふ大御心として表はれるのでございませう。それ故に神社禮拜の尊ぶべきこと、天皇歸一を絶對とする信條からして、佛教、儒教、キリスト教、回教等を排斥し又最近問題にされ出した如き「國教統一」といふ様なことを言ひ出しますことは、如何に國體を尊ぶことから出發した意見であるにしましても、決して國體に隨順し國體の原理に則した考へ方ではないと存じます。複雑な内容をそのまゝに統一し綜合する所にこそ、統一も綜合も眞に内容を豊かに、且又純粹強烈に生み出されるのであります。劃一主義的なものとは比較にならぬ統一性を持つものであります。大稜威が東亞諸民族のみならず世界各民族に及ぶに就きましても、その宗教宗派をそのまゝに信仰せしめつゝ、しかも天皇歸一の宗教的心情が、諸民族にあまねく生み出される姿こそ、宗教政策の原則でなければならぬと存じます。

政治形態について——一國一黨論乃至全國民政治組織化の我が國體に絶對に相容れざる所以

政治に於きましても宗教と同じ原則が存してをりまして、日本では祭政一致と云はれて來ましたことも、單にマツ

リとマツリオトが一つであるといふだけには止まらず、宗教に於いて神社禮拜が絶對的のものとなされ、その反面宗教宗派の自由選擇が許されてゐると同じやうに、政治に於きましても、天皇御親政の犯すべからざることが絶對的である反面に、國民が政見を異にし、政事結社をつくつて行動することが許されてゐるのであります。それは何故かと申しますと、人間には誤ちがあると同じく、政府の施政にも誤ちがありうるわけでありますから、色々の意見が、時に臨んで政府の意見として出されましても、それが誤つてゐたと明かにされ、又別の行き方で國政がなされなければならぬといふ時には、道がそこにひらかれてゐなければならぬのであります。

しかしながら一國一黨論とが、又大政黨贊會に政治的性情を與へて、全國民を政治組織化し、しかも翼贊會が政府と表裏一體であるといふことになりますれば、事實上天皇御親政、即ち國民の諸々の意見から天皇が政見を御採擇になる餘地はなくなり、又その政府の更迭する時は、全國民もろともに政治的意見を異にしなければならぬのでありますから、これは全く幕府的な制度にかへつてしまふものであります。又專制的獨裁的な人民主權政治と、實質上區別がつかなくなつてしまふのであります。さうした事態を當然にもたらすこの行き方は、更に考へをすゝめますれば、折角日本の政治を健全にたもち、永遠に安定的な組織をお定めになつた明治天皇の大御心が、全く仰がれるすべなき有様となつてしまふのであります。如何に政府が全國民的な政治組織をのぞむにせよ、紙一重のけじめは明確にすべきこそ、臣のまさ道と存する次第であります。國體は決して決して抽象的なものではない、私は、ふたゝび、みたび、それを絶叫したのであります。

第一 大東亞皇化圈確立の指標

序

上來、日本國內に整へらるべき秩序に關しまして、大略ながらその輪廓のみ申上げたのでありますが、それは要するに、如何に日本の陸海空軍の威力と、銃後國民の忍耐とによつて、南北を問はぬ進攻體勢を進め得たにしまして、戰時中、並びに戦後の工作にして、萬一にも誤るならば、正に國運は一朝にして傾くことを憂へるからであります。支那事變勃發以來すでに五ヶ年、大臣自ら未だに解決の曙光すら見られぬといふこの事態は、日本が東亞に企てんとした新秩序の原理乃至方策について、深く反省すべきものあるを思はせられるのであります。日米の風雲急を告げ、如何なる新事態が西太平洋で發生するか豫測を許さぬのでありますけれども、南進することによつてのみ支那事變が解決するわけもなく、支那、南方ともどもに、日本本來の方針に則り、彼地に適應した施設が加へられてゆかねばならぬ筈であります。

一、世界が數箇のプロツクに分れるといふ見解に對する疑義

東亞皇化圈論といふ題名で研究を發表致しますけれども、私自身東亞皇化圈論といふ題とその説く論旨とは必ずしも密着しないことを感ずるのであります。それはプロツク政治論或はプロツク經濟論といふやうなものが特に現在叫ばれて居りますけれども、さちいふプロツク政治或は經濟論といふこと自體が果して成立し得る所の立論であるかと

いふことに付て根本的な疑惑を持つからであります。随て何とか適當な論題を求めたかつたのでありますけれども、東亞何々圏と若し言ふならば、東亞皇化圏或は東亞皇化論といふ言葉を用ひるのが些か妥當の範圍に屬するといふやうに考へたからであります。随て若し適當な言葉を用ひるならば、日本世界政策の一段階としての東亞皇化論といふやうな意味でお聽き戴いたならば大體間違ひないと思ふのであります。單に今日ばかりのことではございませんが、全世界に向つて一つの強國乃至民族が、その經綸を行はうとする時には、常に世界政策を持つべきであります。殊に今日の世界情勢下のドイツ、イギリス、更にアメリカ、ソ聯といふやうな諸國は、その世界政策を各々實行して居るといふよりも、何れもその戰爭遂行上の現段階に於きましては、寧ろプロツクの政策を各々持つて居るといふやうに見受けられるのであります。併しながら今日我が國の政治家や軍人或は知識階級の人達がよく言ふやうに、この自由主義的な世界から、次にはプロツクのな世界割據の形勢が來るといふこと、即ちプロツクとプロツクとの提携、或は世界は三つ乃至四つのプロツクに分れて各々安定圏を持つといふやうなことは果して正しい見方かどうか、又歴史の運行がさういふ事態を許すかどうかといふ問題が先に問はれなければならないと思ふのであります。何故かと申しますと、數箇の國家が各々の世界政策を以て相争ふ時に、世界の動きの一つの過渡的段階を取り上げてしかもそれを一面的にのみとらへて、之に論理的な解釋を強いて試みたものが、所謂プロツク論ではないかといふ氣がするのであります。

十七八世紀の頃でありましたならば、二三の列國が互に世界争覇をしながら、自由に驥足を伸ばすことが出來たの

ではありますけれども、今日の如く複雑化して来た世界情勢の下では、列強國の生存權或は生命權の確立といふことが、叫ばれてをるのであります。一國の一つの對外政策も、その國の存亡に重大な影響を與へる時代であります。日本では盛んにブロック論が出ますが、アメリカは決してアメリカブロックの確立などとは言はない。アメリカは依然としてイギリスと同じく、世界全體を相手として世界政策を眞向から實行してゐるかに見えるのであります。併しながらアメリカと雖も、その内面には如何なる政策を執つてゐるか。それを知ることが刻下の日米問題に關聯しましたも極めて重要なことでありませう。アメリカは、歐洲並に東亞に於ける戰爭の間を巧みに利用致しまして、實に巧みなアメリカ、ブロックの建設に當つてゐるのが事實であります。一方ドイツはと申しますと、之も亦相當なもので、世界が幾つかのブロックに分れる、ドイツはヨーロッパブロックをつくるのだと言つて居りながら、事實はブロックの限度を乗り越えて、それを一つの方便とし、口實としつつ、全世界を對象に進んで居ります。ソヴィエト聯邦はとみますと、之は具體的な軍事勢力によつては無くして、一つの思想的な陰謀と申しますが、コミンテルンの世界各國に於ける支局を活動して、これ又別の方面から世界政策を實行して居るといふやうな有様であります。さうした四圍の情勢下にあつて、日本のみがひとり正直に東亞にブロックを作るのだと力んでみましても、東亞のブロックのみを指して凡ゆる問題が論ぜられて居る日本の現状は、まことに洞察力を失つた不見識さを哄はれても致し方のないみぢめさであります。この様なことでは果して次の世界の政局に日本の發言權を確保する基礎が出来るものかどうか。それこそ重大な問題でなければならぬと思ひます。

勿論現在は樞軸側と然らざる側とに天下は二分されては居りませうけれども、天下が二分されて居るといふのは、今まで天下を取つて居つた英米ソの勢力が、未だに樞軸側の勢力よりも遙に鞏固に世界に現存して居るといふだけのことでありまして、これが後退して、少くとも樞軸側の勢力と英米側の勢力とが對等になり、或はそれ以上に轉換して來る時には、この世界二分の情勢は再び複雑な各國割據の形勢と移つて行くのであります。即ち樞軸側と然らざる國との對立が存在しつゞける限度は、思想的には永遠に残り、又繼續される可能性を持つて居りますけれども、併し現實の世界列強の爭覇戦から申しますと、是は早晚複雑な形に移行するといふことを理解しなければならぬと思ひます。それで昨日も、亦今日も色々お話に出ましたけれども、ナチスの世界觀、或はナチス人生原理といふものが、鬭争的な或は力の支配に依つて自然を克服するといふ世界觀を持つのに對して、複雑なまゝに統一し調和してゆく日本の世界觀とそれとの相違から見ましても、やがて近い將來に日本の世界觀とドイツの世界觀が、その世界政策を提げて相争ふ時の來ることも、當然のこととして十分豫知しておかなければならぬのであります。

それ故に英米から來る所の色々のデマ宣傳、或は威嚇外交といふものに吾々が斷じて屈してならないと同じやうに、獨伊が現在如何にその國家存亡の上から、ブロッツク經濟論或はブロッツク政治論を主張してゐるにしましても、我々はむしろ今日のナチスやイタリーが、斯ることを言ふを欲せずして而も言はざるを得なくなつて居るその立場の眞情を洞察しなければならぬのでありませう。もしもその獨伊の立場を理解しないで、吾々が徒らにブロッツク論を云爲し、日本も亦東亞のブロッツクの盟主となればよいといふのでは、まことに不見識も甚だしいと言はなければならぬ

と思ひます。而も東亞の地勢は海上に轉々と島嶼が散在してをりますから、地域的に見ましても、アメリカやヨーロッパとは全然異つた地勢をなしてをるのであります。昨日田所講師は、ヨーロッパは歐洲大陸の一つの半島であると言はれたのでありますが、此の東亞の地域に於けるブロック結成可能性のための地理的條件は、アメリカに於ける南北アメリカ大陸のブロック結成の地理的條件と對比してみましても同様のことが考へられ、この東亞の地勢を以てして、果してドイツやアメリカのブロックに相對抗しうる強力なブロックが成立するものかどうか、頗る疑問に考へられるのであります。併しながら、東亞から外國の勢力を驅逐し、日本の支配權がそこに確立するならば、一應日本の政治力も世界に對して安定するであらうといふことは考へられるわけでありまして、さうした立前から暫く東亞論に入つて行く譯であります。たゞ地圖の上でこゝからこゝまでが東亞ブロックだと云つてみましても、東亞の地勢は洵に複雑であつて、それだけに日本が東亞を安定勢力たらしめるためには、東亞の問題のみを對象としてゐては決して解決せず、常に獨英米ソと對等に世界の問題に發言してゆきつゝ、はじめに東亞も亦自ら修理固成出来るといふことを忘れてはならないと思ひます。私が、日本世界政策の一段階としての大東亞皇化論と申します所以を御了解いたゞきたいと存じます。

二、南米と東亞とを秤にかけつゝ動いて來たアメリカの魂膽は？

そこで、日本の東亞方策も亦、世界の動向を參考として之に對應してこそ、適切臨機の機敏な活動が出来るのであ

りますからして、一應、米、英、ソ聯（ナチスについては餘り多く知られてゐます故、之を略しますが）について些か、その動向を申し上げたいと存じます。

先づアメリカでありますが、アメリカは支那事變始まつて以來極めて敏捷な洞察力を働かせまして、以前の様にグアム島からマニラを経て支那に進む道が、フィリピンと適斷されてしまつて將來永續性がないといふことを見透し、支那に向つて居たアメリカの侵攻勢力を直ちに轉換して南米に向けたのであります。南米に向けられたアメリカの政治工作は、一方蔣介石援助並に各種の對日威嚇外交に依つて、日本の國民の目には少しも映らなかつたのであります。その間アメリカは南米に於て如何なる政治工作を執つて來たでありませうか。常にドイツの擡頭、日本の擡頭に備へたアメリカは、南北アメリカを打つて一丸とする一つの政治勢力の結集に向つて、支那事變始まつて直ちに目標を定めたのであります。それは南米のブラジル、ヴェネスエラ、ボリビア、アルゼンチン、チリ、コロンビア等その悉くをその勢力下に含め、メキシコは最近までそれに強硬な反對をして反米運動を起して居りますけれども、兎に角メキシコを含めての中米南米に向つての工作であります。御存知のやうに、第二次歐洲大戰が起りました前には、南米、殊にアルゼンチンの方面に於けるナチスの經濟的な進出は極めて顯著なものがありまして、その資本投下の額から申しますと、イギリスとアメリカと大體同額であつたのであります。即ち此處ではドイツとイギリスとアメリカの經濟勢力が、正に對等の力を以て進んで居つた。尤も、地理的な條件で非常に近接して居るアメリカは各種の好條件がありましたけれども、兎に角イギリスとアメリカと對等の勢力でドイツが争つて居つたのであります。アメ

リカは支那事變が始まつてから又同時にナチスとイギリスとの戦亂の間に、ドイツとイギリスとの勢力を茲から一切驅逐し出したのであります。

昭和十三年、丁度支那事變が始まつてから約一年足らずの時でありますが、中南米に於て一番強硬なメキシコは英米を相手にして石油問題の紛争を起して居ります。昭和十三年十二月に至りまして、ペルーのリマに於て汎米會議が行はれ、これは十二月九日から二十七日まで約二十日間に亘つて行はれて居ます。その日數から見ましても、極めて複雑な問題が包藏されたといふことが考へられるのであります。内容はどういふものであつたかと申しますと、茲ではアメリカは南米の各々の國を一つの軍事同盟のものにしよといふ意思であります。南米がドイツ或は日本或はソヴィエトといふやうな北米を含めたアメリカ以外の國から侵略を受けた場合には、全アメリカが結束して之に當らうといふ提議をアメリカが南米諸國に出したのであります。之に對してアルセンチンは敢然として反對して居ります。アルセンチンの考へた所は、自國が日本・ドイツ・ソ聯等から壓迫される危険よりも、先づアメリカ合衆國から侵略される危険が多分にあることを憂へたためと、又南米それ自體の中に於て數國が相争ふ危険があつたからであります。それ故、アルセンチンが云ふのは、如何なる國でも、兎に角南米の一國を攻めた國があつたならば、それが南米の國であらうと北米であらうと一切無差別にして、一切の同盟國は攻撃を受けた國に協同して、その敵に當らうといふことを提議したのであります。これはアメリカの蟲のよい提議を素破抜いたものでありまして、之に對して極めて活潑な論戰——但し背後には色々な世界政策を持つ所の列強の勢力を背景として、恐らく猛烈な論戰が展開せら

れたのだらうと思ひます。結局は、アルゼンチンの意見が或る程度通りまして、「米洲外部からの侵略」といふ言葉を「リマ宣言」の中から削除することになつたのであります。併しながら「リマ宣言」そのものはさういふふうで完結致しましたけれども、その時ハル國務長官は、勝手にこの「リマ宣言」を解釋してステートメントを出しまして、その中でアメリカ流に實に好都合な解釋を加へて居るのであります。

一方、それと關聯して注目しなければならぬのは、それから三箇月ばかり経つた昭和十四年二月に、グアム島の防備案がアメリカの下院に於て否決されたといふ事實であります。アメリカは南米ブロックを確保する爲に、凡ゆる手段と時間とを費して、その萬全の策をはかる目的をも含めて、東亞の情勢に對しては極めて辛辣な妨害を加へて來たのであります。それは吾々自身が本當に心から憤激を以て體驗して來た所でありますが、或は日米通商航海條約の廢棄、或は對支軍事援助、或は海南島占領に對する列國共同申入、或は最近に於ける資産凍結令といふやうな色々な問題があります。この間の消息をよくみますと、そこに一つのアメリカの行き方が發見されます。それはどういふのかと申しますと、或は支那に軍艦を送り、物資を送るといふやうな一時的な對日妨害策には、如何なる努力も惜しまないアメリカが、グアム島防備案に對して之を否決して居るといふ事實、即ち、積極的對日攻勢のかまへを斷念して來たといふ事實、これはアメリカが支那と南米とを如何に秤に掛けて見て居るかといふ一つの證左であると思ひます。さうして昭和十四年十月に再び汎米會議が開かれました、米洲諸國の中立宣言、或は中南米に對する特別通商委員會、それから十一月にはグアテマラに於て汎米經濟會議が開かれて居りまして、南米工作は一瞬の間隙もないほど

矢繼早やにすゝめられたのであります。

そこでアメリカが南米に對して執つた所謂南米國內懷柔策といふのはどういふものであつたかと申しますと、之が實に惡辣極りないやり方であります。パナマ運河の直ぐ傍にガラパゴス諸島といふ島が太平洋上にあります。これは非常に軍事的に重要地點でありますが、南米のエクアドルが持つて居る島であります。アメリカはこのガラパゴス島をエクアドルから取らうと考へ、その代償をエクアドルの隣國ペルーに負はせたのであります。即ち、ペルーに對して申入れをなし、エクアドルにアマゾン河の流域地方を割譲させるといふ意向の下に、エクアドルとペルーの間に戦亂を起させたのであります。それが一つであります。それからボリヰアとパラグアイとの間に行はれた紛争、これはチャコ戦争と言はれて新聞にも出て居りましたが、これもアメリカが、この地域に於ける石油利權獲得の爲に使曠した所の戦であります。さうしたアメリカの一つの政策を吾々は常に頭にはつきり入れて置きまして、アメリカが日本の東亞に於ける行動に對して如何なる言動をし、その國力、その軍隊の力を東亞に對して幾何だけ向けるかといふ一つの判定をなすことが極めて重要なことであると思ひます。

三、遠隔の地、東亞で戦ふ不利をかこつ英國の極東政策

それからイギリスであります。イギリスの方は腹背に敵を受けた形でありまして、ドイツと日本、東亞の情勢に於て極めて各方面に敵を受けた爲に、凡ゆる所にその侵略された勢力を挽回する力を求めたのであります。アメリカ

のやうに組織して居る暇もなく、或は南アメリカに、或は東南アジアに、或はビルマ・ルート方面に、或はクカンチナヴィヤといふやうにバラ／＼に補填政策を致しまして、これはさつぱり効果が擧らない。併しながら、あれだけの世界政策を持つイギリスは、アメリカのやうな野蠻な國よりもつと複雑な策略を持つて居るに相違ないでありませうし、何等かの意圖を以てそれ等の工作を、つぎはぎながらつゞけて來たものであります。併しそのイギリスが、日米戦争といふやうなものにどういふ役割を演ずるだらうかといふことは、事變が始まる前から吾々國民の間でよく言はれて居つた問題でありますが、茲に御参考までに御紹介致します。それは、昭和十年に於けるイギリスの有力な政治外交雜誌「ラウンド・テーブル」の中に、イギリスの東洋に於ける、或は太平洋に於ける一つの見解が出て居るのであります。これを御紹介致しますと、

「太平洋に於ける合衆國とイギリスとの共同動作は、合衆國が行動を執る準備ある場合に限つて可能となり、イギリスは日本をして武力を用ひしむるが如き積極政策、又イギリス自身がシンガポール、ボルネオ、ニューギニア、ニュージールランドの線を越えて兵力を動かすやうの積極政策に乗出す譯にはいかない——合衆國が共に之に與らなかつたならば——その理由は明白である。合衆國は太平洋に怖るべき強大なる勢力を張ることが出来るが、イギリスは極く僅かの勢力を展開し得るに過ぎないのである。又太平洋に於て根本的に一層直接に關係あるものは、イギリス本國よりもカナダ、濠洲、ニュージールランド、及び合衆國である。イギリスは成程支那に貿易上の利害を持つて居るし、シンガポールの難攻不落と、外國海軍根據地から印度洋の自由とは、イギリス自身に取つてと共に、イ

ルド及び南アジアの死活的利害關係である。然しながら、支那の將來と日本の執る陸海軍軍事政策とに依つて、結局最もその死活的利害に影響を蒙るのは太平洋に面する英語國民等である。イギリスはこれ等諸國民が共に責任を執る用意ある場合には、如何なる太平洋局地的協約にも参加することが出来る。然しながら、イギリスはもはや單獨に條約を結ぶことは過去に於ての如くにはなし得ない。何故ならば、ヨーロッパの現状斯の如くである以上は、イギリスは單獨ではシンガポール以東に十分の海軍力を動員することは出来ないからである。」

これは昭和十年の有力なイギリスの外交雜誌の意見であります。昨今の東亞に於ける英米合作に就いてみましても、支那事變並びに第二次歐洲戰爭の遂行中の今日は、當時とは餘程條件を異にしてをりますが、ドイツを向ふにまはして概ね英米の苦境も深刻となつて來てゐる現状に於きまして、イギリスが世界に優勢を誇つた七年前から、蔭ではかゝる弱音を吐いてゐたといふことは、我々が斷じて見遁してはならない所と存じます。本國を遠く離れた地域で戦はねばならぬ者の劣勢は、蓋し、根本的な問題だからであります。既にアメリカは日支事變が始つてから直ちに南米に方向轉換をしたといふことは、總て豫期すべき事態が既にアメリカの腦裡に入つて居たからでありませうし、日本の東亞に於ける據頭に對する準備も、かくのごとくして出來て居つたといふことと併せて、イギリスが昭和十年に早くも、總て日本がアメリカ、イギリスの壓迫に耐へて、東亞に據頭する必然的な勢ひを持つて居ると見てゐたことは、云ふまでもなく、日本の東亞進出の成功を、十分に覺悟してのことではなければならぬと考へられます。

四、人民戦線工作と積極的革命工作を交互に行ふ、巧妙極まるソ聯の世界外交

扱、問題はソ聯に移るのではありませんが、今度の支那事變の導火線が、實にソ聯であることについては知る人餘りに少いのであります。又事變以來コミンテルンの對日國內工作も極めて巧妙につゞけられ、日本人民戦線派の活動も亦、實に猛烈をきはめたと云はれてをります。そこで、我々が先づ回顧しなければならぬのは、昭和十一年末に起つた、かの西安事件であります。蔣介石が、コミンテルンの手先となつてゐた張學良にだまされ、西安におびき出されて監禁せられた事件であります。その時蔣介石は、張學良から一命を奪はれるか、然らずんば支那共産黨の公認、ソ・支軍事同盟による對日即時宣戰布告を強要されたのであります。當時日本では、かゝる張學良の行動を以て、單に滿洲の失地回復のためにする、學良の無謀な計畫であつたと報道されたのであります。實はコミンテルンの企てた巧妙な計畫であつたのであります。

蔣介石はかくして約を諾し、一命を全うして南京にかへつたのであります。それからといふものはモスコの赤色宣傳大學の卒業支那學生が、支那國內に續々と、公然と歸國し、要所々々に任ぜられつゝ、支那の赤化と、日支交戰の契機をつくるべく暗躍してをつたのであります。日本を憤激せしめるためには手段をえらばぬといふためか、支那在留邦人が、各地で殺害、否虐殺の悲運に遭ひ出したのもそれから間もなくのことであり、いづれも支那共産黨の陰謀であつたのであります。そしてソ聯が如何なる方法を以て日支の戦ひに臨んだかと申しますと、兩國を相たゝかはし、それを出来るだけ長期化せしめ、次第に資本主義社會としての機構を兩國の國內に清算せしめようといふので

あります。

先づ第一には、日本をして日清日露戦役とは異つた戦争観を持たせるべく思想工作をつゞけ、短期解決を避けしめ、いろ／＼のイデオロギーを日本に送つたのであります。又第二には、日本の國內秩序を戦時下の國民の従順さを利用して、社會主義體制に轉換せしむべく、戦争の蔭にかくれて國內改革が行はれる様にも努力したのであります。革命や國內變革といふものが、常に平時にはなくして戦時に行はれたのが歴史の示す所でありましたが、ソ聯は日支兩國、就中、日本に對してその方策を着々と大膽にすゝめて來たのであります。乍然、私はさうは申しませんが、支那事變は決してソ聯の陰謀から生じたものだとは絶対に申すではありません。天皇の皇軍のすゝむ所、聖戰として行はれつゝある今次の事變は、絶対にかゝる事を許すすべもなく嚴肅なものであるからでございます。たゞ、日本が日本獨自の見解と意圖とを持つて進みつゝある間に、近隣國が、この日本の行動を如何に見、如何に判斷し、そして如何なる工作を打たうとしてゐたかを明かにしたいと思ふのであります。

扱、ソ聯の共産黨は言ふまでもなくコミンテルンを構成して居る一部であります。唯物論とゲ・ベ・ウとユダヤ人の三つを武器にして歩んで來た所のソ聯の共産黨は、實はソ聯國內に於ては非常な失敗を繰返して居ります。それはどういふのかと申しますと、唯物論の信奉は政策の性格的分裂を生じ、ゲ・ベ・ウの跳梁は個人生活に對する非常な壓迫となり、ユダヤ人の跋扈は政治・經濟・文化のユダヤ化を來して、一般ロシア人が非常に不自然な状態に入つて行つたのであります。共産黨の對ロシア人民政策が極めて順調でなかつたことが、最近各方面の文獻調査に依つて

明になつて居ります。一九三五年（昭和十年）モスクワで開かれた第七回世界コミンテルン會議に於て、今までの世界赤化革命の政策が一擲されて、茲に人民戦線政策が採用されたのでありますが、そこで注目すべきことは、昭和十年にモスクワで、世界赤化工作として新しく人民戦線政策が採用されたと同時に起つたのが、スペインに於ける内亂と支那に於ける排日抗日運動であつたといふことであります。日本の中に於きましても、それに呼應して東京帝大を中心とし、或は中央公論、改造等の流行雑誌を中心として、所謂人民戦線派が結成され、これが國內人民戦線運動に参加した譯であります。東京帝大の大内兵衛教授とか、或は今以て全國の學生に親しまれて居る河合榮治郎教授といふやうな人が、その急先鋒となつてこれに呼應したのであります。

併しながらスペインの動亂が遂にフランコ將軍の勝利に終り、ドイツ、イタリーの勝利が確定した時に、即ち一九三九年（昭和十四年）には、このスペインの失敗に鑑みて、茲にコミンテルンの政策の轉換をはからざるを得なくなつたのであります。即ち、スペインに對しては人民戦線政策の撤回、再び赤化革命工作へ逆行といふ様に變つて行つたのであります。所がスペインに於てはさういふ方向に轉換したに拘らず、支那に於けるコミンテルンの政策は、依然として人民戦線政策が持續されたのであります。これは明にソヴエトの目から獨伊の勢力と日本の勢力を比較考量した結果でありまして、日本國內の赤化勢力未だ頼むに足るとの印象を、彼に與へたからに外なりません。即ち、日本國民の或る一部に赤化思想に對する魅惑的な見解があるといふ限りに於ては、日本に對しては強硬に行くよりも柔かに行つた方が宜いといふ政策が含まれて居つたのであります。ドイツ、イタリーに對してはソヴエトは思想戰

に敗北した形でありしたが、更に支那に於ては積極的に抗日、排日思想或は運動といふものを後援し出すに至つたのであります。これは我々日本人として深く考へねばならぬ所でありまして、孫子が「百戰百勝ハ非^ハ善^ナ之善^ナ者^ナ也」といひ、又「不^レ戰而屈^{スル}人之兵^ヲ善^ナ之善^ナ者^ナ也」と申した言葉を想ひ出させられる所であります。併しそれも本年の三月になつて日ソ中立條約の成立をみますと、ソ聯は支那に於ける、或は東洋に於ける人民戦線政策といふものを撤去して、支那に對しても、再びドイツ、イタリーに對する政策と同じ對外政策をとることに變つたのであります。併しながらそれが日ソ中立條約との交換條件であつたかのごとく云はれてをりますが、私はさうは考へないのであります。人民戦線工作の放棄といふことは、即ち裏面に於て寧ろ積極的な赤化宣傳工作を開始するといふ意味にとるべきでありますからして、却つて強力に擡頭して來る民族を擾亂するには、最も有效な工作であります。それも亦時宜を見たコミンテルンの巧みな洞察に依るものであるのではないかと考へられるのであります。隨て私共も深く配慮し、不^レ戰而屈^{スル}人之兵^ヲするの手段に出で、日本國內から赤化勢力を掃滅することの緊要を思はなければならぬと存じます。

五、東亞諸國の政治力を統一し日本を中心として結集せしめよ

以上申し述べました所によつて、大體世界列強の東亞に對する進攻體勢、又その圍繞の動向を洞察し得たと存じますので、東亞皇化國論の核心に入りたいと存じます。然らばブロッツク的な見解を越えて進む所の、日本世界政策の一

段階としての大東亞皇化圏の生成に當つて、先づ缺くべからざる要件とは何でありませうか。それは先づ政治的な勢力の結集であります。この政治勢力の結集とその統一とを度外視しては、又それをなさずしては、斷じて經濟的プロツクも安定し得ず、全く意味をなさないのであります。東亞皇化圏の地域内の問題に入つて行きたいと思ひます。

今日お渡しました要綱の第一に出て居ります「東亞諸國、諸民族をして、日本の政治勢力下に糾合結集せしむるための基本方策」といふ問題に入ります。是は極めて簡單に申しますれば、要するに東亞の諸國、諸民族をして、日本頼むに足るべしといふ自信を與へる問題であります。アメリカの勢力、イギリスの勢力、ドイツの勢力、ソヴィエトの勢力、それと同じ政治勢力を東亞に確立する見透しが日本にあるか、又日本はさういふものを確立し得る能力があり、實力があり、決意があるのかといふことを、東亞の諸民族は見守つて居ります。東亞の諸民族が、これならば大丈夫だといふ確信を日本の行動の中から見て取つた時にこの問題が解決するのであります。即ち日本の國家の外交政策に於ける一つの操と申しますか、志と申しますか、誠心と申しますか、それが明確に東亞の各民族の目に映じた時に、この問題は明確な進展をして行くのであります。それなくしては、如何なる政治工作も、如何なる外交工作も、或は色々情報局あたりでやる文化工作も、斷じて意味をなさない。それなくして試みられるすべての工作は、全く金の浪費であると思ふのであります。「日本頼るに足るべし」といふ聲が澎湃としてこれ等の國々に起るといふことのみを描いては、東亞皇化圏といふものは結成出来ない、又日本の政治勢力の結集も出来ないといふ結論を先に申上げたいと思ひます。吉田松陰が「一誠感^{シム}萬人^ヲ」と申したその言葉は、やはり國家と國家との間に於ても同じことで

ありまして、日本の言動といふものに誠があり、而もその誠は飽くまでも貫かでは已まぬものであるといふことを感ぜしめるといふことを、この根本的な問題として考へたいと思ひます。

そこで、如何にしたら東亞の民族が日本に信頼して來るかといふことを論ずる時に、日本の人はよく日本の出先に行く人達の行動が不道徳であるとか、見識がないとかいふことを申しますが、それはさうでありませう。さういふこともなくする様にして行かなければならない。けれども、それはいくら人がよくなつても駄目であります。日清、日露戦争以後の日本の對支政策の無確信さといふものが、如何に日本の國威を失墜し、支那の日本に對する信頼感を失墜し、或は東亞諸國の日本に對する信頼を失墜したかといふやうな問題を考へて見れば十分であらうと思ひます。日本の陸海軍が天下無敵であるといふことは、恐らく世界中如何なる國民も、如何なる民族も、知り悉して居る所である。併しながらその軍隊の天下無敵であることを知りながら、而も隣國も日本に侮辱的な言辭を與へ、或は東亞の日本に近接する弱小國が言ふといふことは、明に日本の外交政策に志がないといふことを見透されて居るからであります。支那事變が始まる僅かばかり前でありましたが、まだ皆様の御記憶に新たな所であると思ひます、日本の政府が日支互惠通商といふやうな問題を採上げて、兒玉氏を團長として支那に經濟使節を送つた。蔣介石がこれを迎へた。これが昭和十二年の三月であります。丁度事變始まる四箇月ばかり前のことでありましたが、その時に蔣介石が「己の欲せざる所を人に施す勿れ」といふことを日本の經濟使節に向つて言つて居るのであります。さうしてかう申して居ります。「今後とも互惠平等の立場より日支關係の明朗化に渾身の努力を傾注せんと志すものである。」さうした所が、

川越大使或は兒玉團長が「早くその實を結ばせたい」と答へ、この會談を終つて居るといふやうな有様であります。支那の日本に對する愚弄を憤るよりも、その因つて來た所以を根本的に打破し、然らざるものをそこに立てることが事變解決の捷徑であり、又東亞の民族に對する根本的の問題であります。それは日本が政治的優位を以て支那にのぞむといふことであり又それを敢てしうるだけ、國民全體が日本國體の尊嚴性に目覺めるといふことであります。自ら國體に對して確信なきが故に、日本の支那に對する政治的優位を以て、それは帝國主義的な侵略などと、云ひふらす人々こそ、まことに恥しき日本人であります。

そこで、問題は、更に戰爭とは如何にすゝめられるべきものか、戰爭とは短期に完結すべきものであることの重要意義が生れて來るのであります。眞に戰爭をすることが一つの結末を目標として爲された戰爭であるならば、或は勝つことを意思して爲された戰爭ならば、必ず勝敗が明になるのが戰爭の本論であります。凡ゆる古今の兵法を繙いて見ましても、又凡ゆる戰略家の言葉に徴して見ましても、總て戦ひは勝敗に依つて決まるのであります。今日政府も國民も、長期應戰と云ひ、常時臨戰體制と云ひ、或は常時戰時體制と云ひ、平常が戦ひであり、戦ひの體制が永遠に續くのであるかの如く言ふのであります。さういふことを言ふならば、眞に兵法の書物を繙いて研究し直して戴かなければならぬと思ひます。

孫子は「夫、兵久而國利者未之有也」と申してゐます。「故兵貴勝、不貴久」と申してゐます。「是故百戰勝非善之善者也」と申してゐます。「不戰而屈人之兵、善之善者也」と申してゐるのであります。また「善戰者立不敗、

地_二而不_レ失_三敵之敗_二也」と申してゐます。さういふやうに勝敗といふものに對する眞劍なる考察を基礎にして常時臨戰體制が確立されてゐるか否かが重大であります。山鹿素行がこの孫子の兵法を註釋して「孫子諺義」といふ本を書いてゐますが、それにかういつてゐる。

「勝敗ヲ兩陣ノ間ニ争フハ下策ニシテ上兵ニアラズ、勝ヲ廟堂ノ上ニキワメ不出_レ門戸、不_レ暴_レ兵シテ、古今ニタクラベ萬世ニシメシテ、其勝不_レ疑_レヲ必勝ノ兵ト云、是乃孫子ガ所謂必勝也」と。

勝を廟堂の上に極めるといふことが一國と一國との戰爭に於ける重大なる問題であり、一貫した志竝に政策が立たなければ勝を廟堂の上に極めることは出来ないであります。あやふやな政策の過程に於て結局どういふ事態が生じたかと申しますと、戰爭の行動と占領地域に於ける政治工作との區別不明、或は何處から何處まで軍が進みそれを占領したといふこと、即ち白旗を敵に掲げさしたといふことと、その點に於ける政治經濟工作といふものの區別がつかなくなつてしまつたのであります。これを混同する限りに於ては戰爭は絶対に結末がつかないといふ外はないのであります。

それではなぜさういふ事態が現出したかを究明しなければなりません。支那事變の始まる以前、反戰反軍思想が日本の國內に充滿し、而してそれは何等思想的な處置をつけることなくして支那事變に臨みまして、茲に反戰反軍思想の矯正しとしての東亞論が擡頭したのであります。即ち東亞協同體論と申しますのは、近衛首相のブレイントラストと云はれた昭和研究會から出たものであります。こゝにはマルキスト學者が參集してをつたのであります。又、マル

キストの獨壇場であつたところの東亞解放論、これは東亞解放といふ雜誌を出してをりました。東亞協同體といふのは、第一次近衛内閣の背景をもつて出来た所謂昭和研究会によつて日本の政治經濟を壟斷し、大政翼賛會を作り上げて来たところのものでありますが、その東亞協同體論、東亞解放論、それから東亞聯盟論——これは石原莞爾中將が今もつて孤壘を守つてをりまして、これは滿洲國協和會の流れを汲んだものであります。滿洲國の協和會が如何なる思想をもつて如何なる國家社會主義的な政策をもつて擡頭して来たかは、協和會に關する文獻を研究すれば一目瞭然であります。精神科學研究所で發行しました「支那事變解決を阻害するもの」といふ書物に詳しく述べてありますが、さういふ東亞聯盟論、東亞協同體論、東亞解放論といふやうなものが、所謂東亞新秩序建設論として日本國內を風靡してしまつたのであります。しかもこの東亞聯盟論に至つては、支那在住の軍人に多く信奉者を出し、第一次近衛内閣に於ける板垣陸軍大臣が、その後支那に於て「派遣軍將兵に告ぐ」といふ有名な論文を書かれましたが、その「派遣軍將兵に告ぐ」といふのは、全く東亞聯盟論の思想でありまして、さういふ廟堂に立つ御本人からしてうつを抜かずやうな事態を現出してしまつたのであります。板垣將軍の如きはさういふことに氣づかずに乗ぜられたものと思ひますが、さういふ反戰反軍思想の燒直しが東亞新秩序論に移つたのでありますから、茲に勝敗の區別をつけないところの支那事變處理といふものが研究され出した動向といふものは明かにされると思ふのであります。さうして「對外戰爭を國內社會制度の根本的改革へ」といふスローガンがどこからともなく日本の中を風靡致しまして、極めて危険な經濟政策竝に國家政治の改革といふものの實現が、そこに窺はれ出したのであります。御勅語には「東亞

永遠ノ安定ヲ期セヨ」といふ御言葉があつたに拘らず、依然として事變前その儘の混亂状態に、更に倍加した思想危機の事態が、そこに現出して行つたのであります。

今、東亞聯盟論の内容を一寸御紹介致しておきます。これは滿洲國協和會の出身である宮崎正義といふ東亞聯盟の中心人物の述べてゐる言葉でありますが、二三御参考までに申上げてみたいと思ひます。

「滿洲國ハ歴史的及び現實的理由ノ下ニ、日鮮滿漢蒙等諸民族ガ各々言ヒ分ヲ有スル地域デアツテ、中華民國ヨリ分離シ獨立シタル東亞諸民族協同ノ國家デアル。從ツテソノ一部ナル日本民族ハ相互平等ニ置カルベク、且ツ之ニ満足スベキデアル。

民族協和ノ協同體ハ必然各民族ヲ派遣セル本國相互ノ融和親善ニヨツテ確立セラレル。即チ滿洲國ノ健全ナル發達ハ逆ニ東亞諸民族ノ平和親善ヲ誘引スル。コノ意味ニ於テ滿洲國ハ東亞聯盟各國家結合ノ精神的核心デアル。」これが宮崎氏の結論であります。更に、

「大轉回遂行ノタメニ日本ハ幾多ノ課題ヲ負ハサレデキル。ソノ第一ハ在來ノ帝國主義的侵略思想ノ殘滓ヲ徹底的ニ清算シ、東洋固有ノ大乗的王道精神ニ復歸シ、東亞聯盟ノ眞義ヲ支那民衆ニ理解セシメルコトデアル。否、ソノ前ニ日本國民自ラコレヲ充分ニ味得スル必要ガアル。」

といつてをります。滿洲國協和會の思想からいふ時には、日清、日露戰爭に於て支那から領土を取り或は割讓を受け、賠償金を取つたといふことは帝國主義的侵略として排除されてゐるのであります。明治天皇御親ら全國家をあ

けて戦ひたまふた日清日露兩役が、彼等にとつては、一つの日本の罪惡史の中に加へられたのであります。何んといふ不遜な考へ方でありませうか。更に宮崎氏は次の様に申してをります。

「東亞聯盟ノ盟主ハ、若シ他ノ盟邦ニ於イテ同意シ推戴シ奉ルナラバ、天成ノ王者允文允武ノ上御一人ニマシマス。日本國家ハ觀念上滿洲國、支那國等ノ聯盟構成國ト全ク同列ニ立チテ、ソノ間ニ何ラノ上下關係ヲ生ズルモノアラズ、各民族何レモ平等對等ノ立場ニアリテ、國家ヲ成スモノデアル。」

天皇を東亞の盟主にいたゞくにしても「他ノ盟邦ニシテ同意シ推戴シ奉ルナラバ」といふ前提は一體何たることでありませうか。しかし戰爭繼續中の敵國を以て平等對等の立場に立たせて、東亞の秩序云々とは、まことに愚劣も甚だしいことであります。洵に恐るべきところの思想といふ他はありますまい。

これに對しては、京都帝大の小牧實繁教授も憤慨されたものと見え、「日本地政學宣言」といふ書物の中で次の様な言葉を述べてをられます。

「近時巷間に流布せられる所謂東亞協同體論、東亞聯盟論等には、皇道の本質に照して深く反省せらるべき重要缺陷が包藏せられると斷ぜざるを得ない。……西洋流の、單子論乃至は原子論に淵源する如き、個人主義的對立の思想に立脚する東亞協同體論乃至は東亞聯盟論によるのでは、最高至上の愛と同化は望み難いとすべく、東亞の混沌は永久に修理固成せらるべくもなく、之によつて東亞に新秩序をもたらさんとする如きは、恰も木によつて魚を求むるのたぐひたるの譏りを免れないであらう。實に恐ろしきは見えざる謀略の手なるかな。日本民族よ目覺めよ！」

といふ言葉を吐いて警告をしてをります。

結局日本も支那もその他のものも、それ／＼統一したところの政治的統一體であるといふ風に簡單に見て、茲に對等平等の形で政治勢力を結集しようといふのが、これらの俗論に共通するものであります。これらの論がことごとく、はじめにお話しました様な唯物史觀を持つてをりますことも考へ合せるべきことでありませう。

この様な東亞方策は、要するに上下秩序のない平面の構成でありますからして、如何なる辯解を持つて來ましても、絶對に東亞に政治勢力の結集を見ることの出來ない議論であります。今日既に、今朝の新聞にも出てゐましたが、皇軍が進駐した佛印に於てすら、佛印の對日通商が既に英米の方に加擔せんとしてゐる。政治の問題を措いて經濟的な提携或は經濟的な支援の効果のみを云つてゐる間には、極めて深刻な外國勢力の東亞覆沒の意思が、一刻の容赦もなく進攻して來ることを忘れてはならないと思ふのであります。

日支兩國の問題について見ましても、共存共榮といふことでは斷じて新秩序の建設は出來ない。秩序といふことは、上下の秩序とか本末の秩序とかをこそ秩序といふるのであります。上の中心體がなくて秩序といふものは出來ない。共存共榮或は互惠通商といふやうな言葉の残つてゐるその思想を清算せずしては、東亞に新秩序は絶對に出來ないのであります。

日米戰爭といふやうなことを申しますれども、アメリカが日本に於て、或は支那に於て、或は東洋に於てなしたつゝあるところの日本に對する反撃工作といふものは、南米に於けるアメリカの勢力、或はドイツ、イギリスの戰爭を背

後に廻したところのアメリカとして極めてこれは限界があります。それ故にこそかなり猛烈な反撃を日本に加へるかも知れないが、それは日本の世界政策が確立してをれば、如何ともしがたく棄てざるを得ない、アメリカの立場であります。さういふ状態にあつて日本が支那並に東亞に對するところの進政政策と申しますか、この打つて一丸となすところの政治方策は、眞の意味に於ける新秩序でなければならぬことを繰返し／＼反覆致したいと存じます。所謂帝國主義的な侵略といふときは、形の上の問題でもなく、戦争のやり方の問題でもないのであります。進むべき時に進み、日本が政治の責任を以てのぞまねば、安寧秩序がもたらされ得ぬ様な所は、日本自らその政治責任を以て之に臨むべきであります。一刻も早く秩序を回復することこそ大切な事であり、従らに「新しい戦争觀」(週報叢書、新支那讀本)などと云つて、純粹な考へ方をまぎらはすことは避くべきであります。眞に日本が東亞の永遠の責任を負ふといふことが、東亞に於ける政治勢力を結集する第一の問題であります。支那のみならず、或は東亞各地に於ける政治上の永遠の責任を日本が負ふといふことは、單なる領土欲に出發する外國の行き方とは根本的に相違してゐるのであり、さうしたことを自覺しつゝ、日本は、嘗々と日本の帝國主義を宣言してすゝむべきであります。日本は日本帝國であり、大日本帝國主義といふスローガンこそ、まことに掲げ上げべき旗印と信じます。

帝國主義といふのは、實は、マルキストが申した言葉でありまして、資本主義搾取といふ言葉も同じであります。それは總ての事態を経済的物質的にのみ見たところの見方でありまして、さういふ言葉によつて吾々は亂されてはならない。飽くまでも世界全體に日本が日本の政治的責任を負うて行く立場に於て、眞に責任あるところの政治を敢然

と行はなければならぬ責任があるわけでありませう。日本が若しカナダ或はハワイ、或はアメリカ合衆國全土を占領したとするならば、それを誰が帝國主義的侵略といふでござらませうか。要するにソヴィエトの思想に禍ひされた蒼白きインテリが、日本よりも弱い小國に向つて日本が進出して行くから、帝國主義的侵略といふだけのことでありまして、強國に向へば恐らくさうはいはないといふことを考へなければならぬと思ひます。要するに弱小國に向ふことが、それだけで帝國主義的侵略であるといふならば、一切戦争行為といふものは否定され、戦争にははりつゝ結末のつかない戦争をすることになり、さうした國は遂に孫子の言葉をまつまでもなく、滅亡の一途に近づくのであります。

實際、さういふ眼に見えないところの陰謀に操られた實に不甲斐ない日本の知識階級或はジャーナリズムといふものは、この半年來A B C D S包圍陣に日本が圍まれてゐると錯覺したのであります。この言葉はA B C D Sといふ語呂が極めて人の言葉に傳はり易かつたためかも知れませんが、事實斯かる包圍陣なるものは實存しないのであります。て、各々の國家が各々の國家的意圖から日本に對する一つの政策を持つてゐるに過ぎない。それを如何にも鞏固な紐帶をもつて包圍してゐるかの如き錯覺を起させてゐるところの陰謀竝にそれに乗ぜられたところの卑屈な日本の輿論の状態といふものこそ、極めて歎かましいものだと思ふのであります。

六、東亞諸民族の獨立運動の真相

次に東亞諸民族の獨立運動の狀況について簡単に申上げたいと思ひます。これは所謂民族解放或は民族自主獨立と

いふやうな言葉が云はれて來たのでありますが、それは各々イギリス的な東亞支配の政策に於けるカモフラージュであつたり、或はソヴィエートの赤化政策に於ける一つの便宜的なトリックであつたといふことを知らなければならぬのであります。私がこの問題を調べます時に、多くの東亞民族の本を顧いて調べました時、悉くがイギリスやソ聯で書かれたところの民族獨立運動を、如何にもその民族の獨立運動の真相であるかの如くその儘受賣りしてゐる状態が極めて多かつたのであります。この問題は今後詳しく研究をする餘地が残されてゐると思ふのであります。

ソヴィエート・ロシアは土着民主主義と申しますか、その土地に密着してその土地を守るといふ土着民主主義といふものと國際的ボルシェビズムとを全く提携せしめることに成功し、そこにソヴィエートの東亞弱小國に對する赤化政策が非常な成果を收めて來たのであります。殊に蘭印を中心とする東南アジア地域に於ける赤化宣傳工作といふものは極めて顯著に進んで居まして、或は汎マレー運動、或は汎アジア運動、汎回教運動等、悉くインターナショナルな表現をもつところの運動がソヴィエートの背後勢力の下に動かされて來て來てゐます。

しかしながら、さうした中でも、沿海州をロシアが掠奪してから、かなりの年月が經つてゐるわけでもありませんが、東部ソ聯に於けるソヴィエートの政治といふものは極めて困難を來してゐる。ブリヤート族とかヤクート族とかいふものは極めて同化しにくい性格を持つてゐます。さうして常に色々の獨立運動に従事したところの反動が起つてゐるのであります。これはやはりソ聯内のそれらの民族が、蒙古民族としてのソヴィエートに對する一つの根本的な不滿の爆發であると思はれます。

ヨーロッパに對しては、プロレタリアの獨裁といふことを一九一七年の二月革命でいつたところのソ聯が、ソ聯の内部に於ては「ロシア各民族の權利に關す宣言」といふのを發表して、ソ聯の各民族に自主獨立權を與へるといふことを云つたのであります。さうしなければロシア聯邦は到底出來上らなかつたのであります。アメリカが合衆國の形をとることによつてはじめて一國家をなし得たと、同様の經路があります。生きんがためと申しますか、とにかく國家をまとめるための苦肉策であつたのであります。かうして極めて苦難の道を辿つて出來たロシア聯邦は、回教徒の宗教を否定したところからしてソ聯領内の回教徒から猛烈な反撃に遭ひつゝ今日に及び、その反撃は又極めて根強いものがあります。唯ポーランド分割の折には、ウクライナ人や白ロシア人はソヴィエートの民に掛つてしまひまして、ソヴィエートがドイツの方へ進攻政策を採るために、スラブ民族を是認して、大スラブ民族主義といふものをソヴィエートが肯定すると宣言しましたために、ウクライナに於ける白ロシア人は、すつかりだまされてソヴィエート化してしまつたといふ事實があります。それは丁度、第一次歐洲大戰の折に、イギリスが回教徒の帝國を建設するといつてインドを騙し、さうしてアフガニスタン、ベルシヤ、中央アジア、トルキスタン地方の回教諸民族に對して、それらの民族が飛びつく様な好餌を與へて置きながら、東亞進出に利用して來たといふ問題と全く同じ手をソヴィエートが打つたのであります。(大戰後イギリスはこの約束を果さなかつた)

しかしながら、ソヴィエートに於ける宗教的叛亂といふものは極めて複雑多岐な性格を持つてをりますが、武器も持たず、凡ゆる政治的な迫害を受けながら常に匪賊的な性格を持つて——これは一概に匪賊として葬り去られてゐる

のでありますけれども、ソ聯邦が出来た時に、苦肉の策としてソヴィエトが宣言し、又ソ聯邦各共和國に許したところの民族自決論といふものは、全く民族自滅論に轉向してしまつてゐたことは事實であらうと思ふのであります。さうしてアフガニスタン、トルキスタンの地帯、或は新疆諸國、或はベルシヤ等の地域に於ける回教徒は、常にイギリスとソヴィエトの勢力争ひにこの百年以來利用されてゐるのであります。極めて不遇な、それ故に東亞に新しく擡頭して來てゐるところの日本に向つて常に憤懣を持ちつゝ、民族運動とまで行かないながら一つの苦痛に喘いでゐるといふやうな有様であります。

次にインドの方はどうかと見ますと、此處には親英的な七十万の回教徒と獨立的な二億の印度教徒がゐます。これも團結的に鞏固な根を張つてゐるのであります。イギリスが第一次歐洲大戰に於て、トルコに對してトルコ帝國の建設を約しながら、大戰後苛酷な處置をトルコに對してなした。それに憤慨したところの運動が極めて活潑につゞけられて來てをります。これが所謂ガンヂーの國民會議派の不服從運動と結合して一九二〇年には次の様な決議をさへ致してゐます。

「該無協力運動は在印度回教徒を絶対に拘束すべき宗教的義務にして、精神界及び俗界に於ける回教主權者即ちトルコ皇帝の地位が戦前のそれに回復せられる迄繼續すべく、且つ印度の改善のため回教徒、印度教徒の一致團結を要望す。」

といふやうな強硬な決議によつてこの運動が續けられてゐます。しかしながらこの運動も一九三四年に至りますと、

もはや純粹な獨立運動ではなくなり、ソ聯の勢力が入つて來まして所謂コミンテルンの民族自決論がこれに混入してしまつたのであります。さうして一九三四年にインドに結成せられたところの共産黨は「權力は國民大衆の手に。國家統制經濟の確立。外國貿易の國營。共同農作。王侯地主資本家階級の撤散」といふ決議をもつてこの運動を始めてゐます。ガンジの運動それ自身も幾多の缺陷を持ち複雑な性格を持つてゐるでありませうが、それが近年極めて後退的な行き方を辿つてゐるといふのは、ソヴィエトの勢力からするところの擾亂工作的な民族獨立運動がそこに入つて來てゐるからと見るべきでありませう。

ビルマ、或は佛領印度支那、或は更に蘭領印度あたりになつて來ますとかなり積極的な赤化運動が続けられてゐまして、インドネシヤ共産黨の活動といふものは極めて頑強な勢力をもつて開始されてゐます。さうした問題から更にフィリツピンの問題に移つて見ますと、このフィリツピンといふ土地の獨立運動といふものは極めて特色的な性格を持つてゐます。フィリツピンが現在アメリカから獨立するといふのは、アメリカの國內政策の犠牲になつたと申しますか、所謂政黨政治争ひ——共和黨と民主黨の政黨政治争ひを背景を持つてゐることが一つと、既にキューバに米國の非常に廣大な砂糖栽培が行はれて來て、フィリツピンからの砂糖の輸入は却つてアメリカの經濟を危険ならしめる可能性を持つといふ危惧から來るところの、所謂フィリツピン邪魔もの扱ひの獨立運動といふやうなものであります。しかしさういふものとは反對に、アメリカがスペインからフィリツピンを奪つた時に、此處のモロ族といふ民族が、これこそはフィリツピンに密着したところの頑強な民族運動を展開してゐましたし、又それは根強く今日も根を

張つてをります。これは現在アメリカがなしつゝあるところのフィリッピン獨立運動とは極めて性質を異にするところの問題であつて、日本が若しアメリカの勢力を排除し、日本独自の力を以て東亞に政治的な勢力を結集する際に於ては、茲にモロ族を中心とする獨立運動が擡頭する兆しを見せてゐるのであります。この方面に於ける宣傳工作といふものには日本は現在力を注いでをりませんけれども、そのモロ族自身の意見は極めて日本人的な方向に向つてゐるのであります。一八九八年——日清戦争より約十年ばかり前のことであります。アメリカがスペインからフィリッピンを奪つた時の獨立運動に於けるフィリッピンの志士ホセ・リザールが書き残したノリメ・タンメレといふ書物があります。これなどもフィリッピン人には餘り讀まれてゐないやうな状態であります。彼はフィリッピンの獨立運動に參畫して遂に捕はれ刑場の靈と消えたのであります。その辭世の歌——「ホセ・リザールの死に臨んでの歌」をみますとまことに心うたれるものがあります。長い間お話ししてお疲れのことと存じますが一部を御參考までに讀んでみたいと思ひます。この譯者は松田福松先生でありまして、憂國の情に一貫して來られた方でありすだけに、松田先生の名譯によつてフィリッピンの一獨立運動家の志が、日本の國を護るところの人の志に生かされてこの譯がなされてゐます。今私がこれを読みますのは、恐らくかうした眞に國家獨立の意思に燃えた民族的な志士が、人しれず日本の騒起を祈りつゝ、東亞各地に散在してゐるのであらうと考へるからであります。

さらば祖國！

國の愛ぐし兒、

東海の眞珠、

我らが愛の樂園よ！

我は悦びて汝にさゝぐ、

この枯れ果てし玉の緒を。

よし更に恵まれ、輝かしくとも

我はなほ、そを汝にさゝげむ、

さゝげて悔いじ。

戦ひの場に我を忘れて

疑はず、かへりみせず、

いのちさゝげし人もありき。

ところは變れど心同じ……

刑場の石も廣野の草も、

戦ひもまた殉道の死も、

家を憶ひ御國に盡す

道に二つなし。

我は死す、

白々と夜の明け初めて

いま、闇の消えゆく時。

曉の光、色足らはすば

いざ、我血注がむ

御國の爲に、

明けゆく光に色添へむため。

(中略)

はかなくも打たれし我を

憐れまむ人もあれよ。

静かなるゆふまぐれ、

あゝ我が祖國！

祖國より祈りさゝげてよ、

我安らかに眠るべく。

哀れにも死にゆきし人に、

限り無き苦しみ受けにし人らに、
悲しみに世もあらず泣きけむ母らに、

夫なき妻、父なき子らに、

拷問にかけられし囚れの人々に、

また汝みづからに、

獨立の日の來らむために

祈りさゝげよ。

七、東亞の地勢は日本が世界文化を綜合統一すべき使命を暗示する

日本の世界政策の一段階としての東亞皇化論を述べて、時間の關係もあり、また力の足りない點もあつて十分に説き盡せなかつたのでありますけれども、これは現在流行してゐる東亞何々論といふが如き東亞論を否定するところの意見であります。繰返し申しますが、日本歴史に對する見方を是正し、唯物史觀を排し、更に日本の政治的優位を以て東亞にのぞむといふのであります。決して單に東亞プロツクの確立を目指すものではない、眞に太平洋、大西洋或は歐洲、アジア兩大陸に跨つて、やがて來たるであらうところの世界勢力角逐の場に於て、日本が少くともイギリス、アメリカ、ドイツ、ソヴェエト等の諸國と對等に發言權を確保するための進路であります。それなくしてはこ

の東亞の地域は全體的な崩壞の危険に暴されるかもしれぬといふ憂ひすらあるからであります。先程申上げましたが、アメリカの地勢はプロツクのに結成し易い。イギリスの運命が如何にあるにせよ。何れにしましてもプロツクを結成し易いところのアメリカやヨーロッパの地勢に對して、この東亞の複雑な地勢といふものは、簡単に結合が出来ないといふことは、更に深く考ふべきことがあるのであります。それは、極めて複雑な文化が此處に凡ゆる角度から凡ゆる性格をもつて集中するといふことであります。即ち力に窮極の價値を置くナチスの世界觀、實利功利主義から來るところのアメリカの世界觀、或はイギリス流の世界觀、或はソヴェエトのマルクス主義的世界觀、總て此處に複雑な世界觀を展開するのであります。眞に複雑な地勢狀況或は環境を、人間の心の中に統一し盡すところの綜合的統一的な意思といふものが、日本の國家、また日本の國民に眞に確立されなければ、この世界の情勢といふものは東亞に取つて危険極まりないものであることを感ずるのであります。私が大東亞皇化圈論といふこの講演の前半を強いて多大にさいて、日本歴史の見方や日本世界觀の在り方を強調致しました理由も、かくて御了解していただけるかと存するのであります。

ウエルネル・ローエといふドイツ人はかういふ興味あることをいつてゐます。

「太平洋に於て優勢」であるといふ場合、何はさて置いて、領土的な勢力が擴大したことだと考へてはならない。何故なら、太平洋は唯一つの廣大な水域であるからである。僅かに小さな島の集りがあちこちと散在してゐるが、これも、戰略的な意味を持つてゐるだけで、經濟的な、況んや移民政策的の意味は全くない。太平洋には占領すべき

「領土」といふものがない。若しありとしても、戦争に訴へてまでこれを獲得しなければならぬといふやうなものはない。ここでは領土が問題なのではなくて、沿岸の支配といふことが問題なのである。」

と、これをドイツの世界政策的な見地から述べてゐる。吾々はこの可成り穿つた、さうして可成り適切にナチスのドイツ人が云つたことよりも、更に數歩百歩をすゝめて、世界の複雑な文化を、渾然として統一しつゞける所の一大文化圏を茲に確立するといふ方向に向つて進まなければならぬのであります。日本國體の眞の威力と、日本文化の眞の姿を世界國家と世界文化の激流のさなかに、顯現しそこに眞價を客證することこそ、日本の八紘一宇の眞價が示される時であります。南と北、或は西と東から來るところのプロツクのな勢力、或は複雑な世界觀的な勢力に對抗して、所謂大東亞皇化圏、日本の世界的發言權を確保することは、その覺悟と自負なくしては斷じて不可能であります。

「一切の環境統御の調和的攝取統一力」としての日本文化——日本世界觀と申しますか——の確信をこそ、すべての國民が持たねばならぬ秋であります。日本に古來から傳統的に存し、凡ゆる文化の統一を果しつゝ、祖先の死守し護持したところの日本文化の力を、日本の全國民は今こそ眼を見ひらいて見なほさなければならぬ。知識階級も爲政者も軍人も、迷ひの目から潤然と目覺めて、一切を統制と機構や、又人間を物質扱ひにして解決しようとする脆弱な骨組細工に、國運を托する様なことは許されない筈であります。一朝にして潰え去るべきものと然らざるものとの區別、それらに上下の秩序を興へることが緊急の要事であります。一切の環境を統御し調和してゆく攝取統一力を持つてゐるところの日本文化をこそ、日本國內の思想を整備する中心の價値として顯揚しなければ、日本の今後は極めて

重大危局に直面するものと申すべきでありませう。

國難到來といひ祖國存亡の秋と申しますけれども、それはイギリスとかアメリカとか、或はソヴェエトとか、さういふ假想敵國の、或はA B C S ラインといふが如き幻想的ライン、また實際的な軍隊の力、或は物質の力、或は自然の力に對するものではない。凡ゆる情勢に對して確乎として搖がないところの日本國民の精神生活、日本國家の傳統的な力が失はれんとしてゐる、現在の政治の動向こそ、最も恐るべきところの強敵であります。

八、東亞諸民族は「愛民の天子」の降るを待望しつつあり

日本の自主といへば直ぐアジアのためのアジアといふやうなことを云つてみる。或は支那の文化といつてみたり、東洋の文化といつてみたり、その様なことは一切抽象化されたもので少しも具體的でなく、それ故に何等の立脚點を確保出來ぬことであります。抽象的な美辭麗句の羅列から、臣道實踐も國體明徴も抽象化されて來てしまつた現在の政治を見て、東亞の各民族或は諸國民が、如何にして日本の政治勢力下に結集し、或は日本を頼つて茲に驟起しようとする決意をつけ得ますかどうか。まことにたゞならぬ事態が到來してをるのであります。

支那四億の民衆は、その何千年の歴史の中で眞に求めて已まなかつたのは、「民を愛する天子」が支那に降るといふことであつたのであります。恐らくそれは支那ばかりではありませんまい、磨げられ苛まれ盡したところの東亞の諸民族が、眞に民を愛し國土を愛する天子を戴くことを如何に渴仰し、戀ひ焦がれ、それに向つて活動して來たかを知る

べきであります。しかも日本國民が、現實に戴いたところの 天皇陛下に歴代の御製御勅の中に含まれてゐるところの、 天皇御自身の大御心の文化的な力といふものを確信することが出来ないならば、この政策は遂行することが出来ないであります。「愛民の天子」こそ、東亞新秩序の政治的・文化的・經濟的中心者であります。日本國民自ら國體に對する信を、更に／＼新たに、又更に純化することが要求されてをるのみであります。

それ故に、日本の國が天地と共に窮りない限りに於ては、その日本の國家を榮らすところの國內思想に對する思想戦も、亦無窮であると私共は考へてをります。それ故にこそ國體防護の思想戦は、悲劇に悲劇を重ねてこそ、國體の源泉も護られ、その中核が護られて來たのであります。日本の歴史に鑑みて見まして、決して安價な外形的な機構の改革や、昨日の眞理が今日の虚偽になり、昨日の善が今日の背徳になるといふやうな簡單なる問題の見方が支配するに於ては、國家は累卵の危きに立つてゐると見なければなりません。全東亞、否全世界の民族の苦と、その將來に光明を與へるもの、まさしく日本をおいてなく、日本は亦、 天皇御親政の國體なくして存せざることを、今改めて痛感して參りたいと存じます。何が故に日本が諸民族の政治の責に任ずることを、不道徳的に考へるのか。それは自ら信ずる所、自ら國體を信ずる所、又 陛下に歸一し奉る心情の純粹さに、何かしら缺くる所あるが故ではないでありますか。(拍子)

(昭和十六年十月二十七日 於赤坂三會堂 日本世界觀大學講座第二日)

昭和十六年十二月廿日 印刷
昭和十六年十二月廿三日 發行

【定價五拾錢】

著者

小田村寅二郎

編輯兼
發行人

東京市麴町區麴町三ノ六
三島弘

印刷人

東京市芝區西久保巴町三〇
近藤喜七

印刷所

東京市芝區西久保巴町三〇
順弘社印刷所

發行所

東京市麴町區麴町三丁目六番地

精神科學研究所

電話九段四四六九番
振替東京一七三五五番

